

タカブシギ *Tringa glareola* Linnaeus

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や休耕田などの淡水湿地に渡来するが、1980年代半ば以降に個体数が著しく減少している。水田を含む淡水湿地にのみに生息できる種であることから、沿岸域の淡水湿地が少なくなっており絶滅の可能性がかなり増大している。

【形態】

全長 19～21cm。頭部および上面が暗褐色で白斑が散在する。眉斑は白く明瞭で眼の後方まで伸びる。夏羽は、顔、頸から胸側にかけての縦斑が明瞭だが、冬羽と幼羽では目立たない。脚は黄色く長い。飛翔時に腰と尾が白く見える。



愛知県幡豆郡一色町, 1990年8月25日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、少数が越冬する。

県内では、主に春と秋の渡り期に伊勢湾、三河湾沿岸を中心とする平野部の水田地帯に生息する。少数は、内陸の中小河川などで越冬する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は4月上旬から5月中旬頃まで、秋期は7月から9月にかけて、水田や休耕田などの淡水湿地に渡来し、数羽から20羽程度の群で生息する。内陸部の中小河川や養魚池などで越冬することもある。干潟を始め海岸部の塩水湿地で見られることはほとんどない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、愛西市(旧立田村)、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺があげられ、その他、平野部の水田や中小河川でも少数が見られる。1980年代半ばまでは、これらの地区で普通に見られ1979年の春期に汐川干潟周辺で375羽が数えられたこともある。近年は水田の転作による乾燥化で餌となる土壌生物や水棲生物が消滅していることで、県内での生息数が激減している。

【保全上の留意点】

淡水シギ・チドリの生息する水田では稲作の継続を基本として、水田本来の生態系を保った形の淡水湿地環境を保全し、自然性の回復に努める必要がある。

【特記事項】

シギ・チドリ類の全国調査における愛知県内でカウントされた本種の個体数は1981～1983年の春期が最大947羽～最小697羽、1996～1998年の春期が最大67羽～最小37羽であり、近年では十羽を超えることも稀になっている。この数を単純に比較することは妥当でないが、確実に著しい減少傾向にある。

【関連文献】

- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.229. 文一総合出版, 東京.
日本野鳥の会研究部, 1982-1984. シギ・チドリ類全国一斉調査 1981年, 1982年, 1983年報告. strix vol.1-vol.3. 日本野鳥の会, 東京.
藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.132. 世界文化社, 東京.